

平成29年8月30日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：木村、田中、手嶋

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk\_bunka@city.abiko.chiba.jp

# 旧村川別荘だより



## 124・125 合併号!

### 今月は夏休み合併号です!

あっという間に7月が始まり、そして8月が過ぎていきました…。みなさまはどんな夏でしたか?7月はうだるような暑さが多かった印象ですが、8月は一転して、雨の多いお盆となりました。冷夏という言葉を久しぶりに聞いたような気がします。



今月は、7月・8月を振り返るおたよりです。学んだことを思い出しながら見ていきましょう。

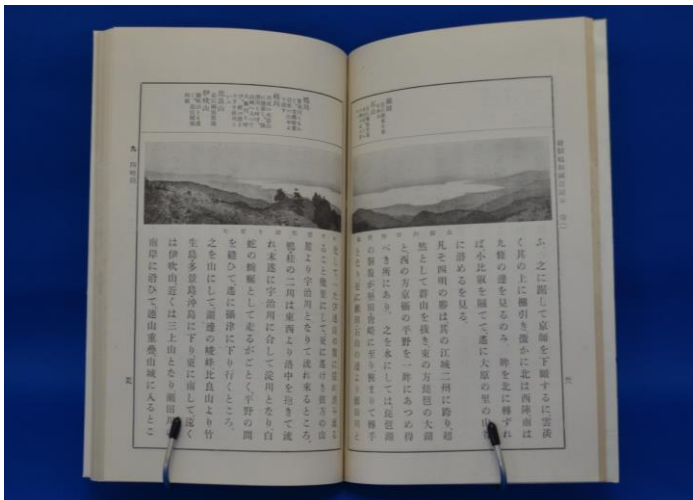
### 杉村楚人冠記念館のテーマ展示について

7月の月例会では、杉村楚人冠記念館・学芸員高木さんから説明をしてもらいました。5月20日(土)から7月9日(日)まで行われた展示では「教科書にのった楚人冠」と題して、教科書で紹介された楚人冠の作品を紹介しました。

#### ○教科書にのった楚人冠

このテーマ展では、主に旧制中学校、旧制高等女学校の教科書に掲載された楚人冠の作品を紹介し、当時の人々が学業を学ぶ中で、どのような作品に触れていたのかを知る展示となりました。どういった教科書にどのような内容が掲載されていたのか、順番に見ていきましょう。

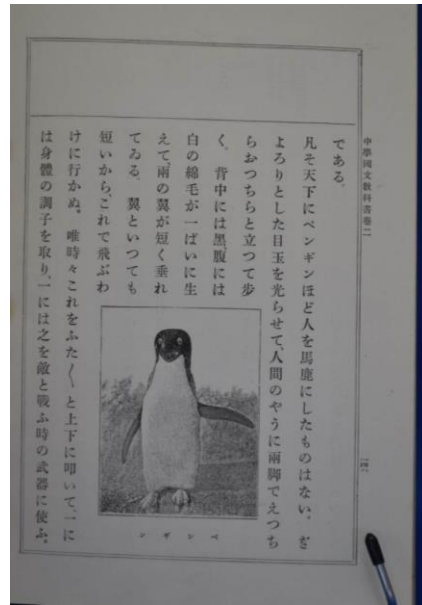
#### ◆『新制昭和国語読本』巻二(育英書院、昭和6年版)



紀行文「<sup>しめいがたけ</sup>四明嶽」(『へちまのかは』大正3年所収)を掲載しています。比叡山の山頂上の四明ヶ嶽からの眺望を説明する部分に合わせ、同地点から望む琵琶湖の写真が掲載されています。両ページに渡るパノラマ写真となっており、現代にも通じるものがあります。

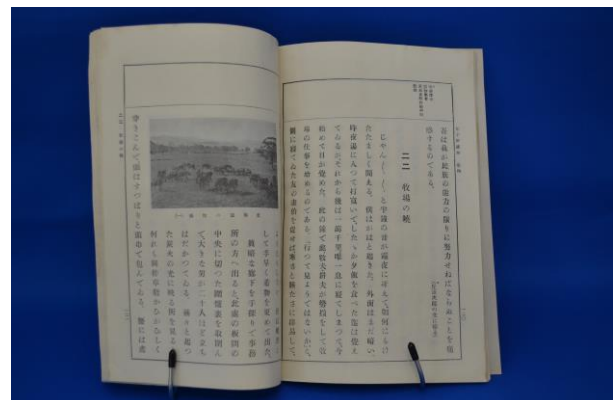
#### ◆『中学国文教科書』巻二(光風館書店、昭和6年版)

随筆「ペンギン」(『へちまのかは』大正3年所収)を掲載しています。



ロンドンの動物園で見た経験や各種の南極探検記をもとにペンギンの様子を書いた文章です。数多くの楚人冠の文章の中でも、教科書への採用数はこれが最多です。

#### ◆『女子新読本』巻四(至文堂、大正14年版)



楚人冠が執筆していた当時はまだ珍しかった大規模酪農経営を行っていた福島県の岩瀬牧場を訪問し、その様子を描いたルポの一節「牧場の暁」(『ひとみの旅』大正2年所収)を掲載している教科書です。

文部省唱歌「まきばの朝」のモチーフになった文章と見られており、この作品が様々な教科書に掲載されているということは、「まきばの朝」作詞者杉村楚人冠を想像させる一節となっています。参考までに歌詞を載せますね♪よく歌った思い出があります。(\*\_^\*)

【歌詞：文部省唱歌 『牧場の朝』】

ただ一面に立ちこめた  
牧場の朝の霧の海  
ポプラ並木のうっすりと  
黒い底から勇ましく  
鐘が鳴る鳴る かんかんと

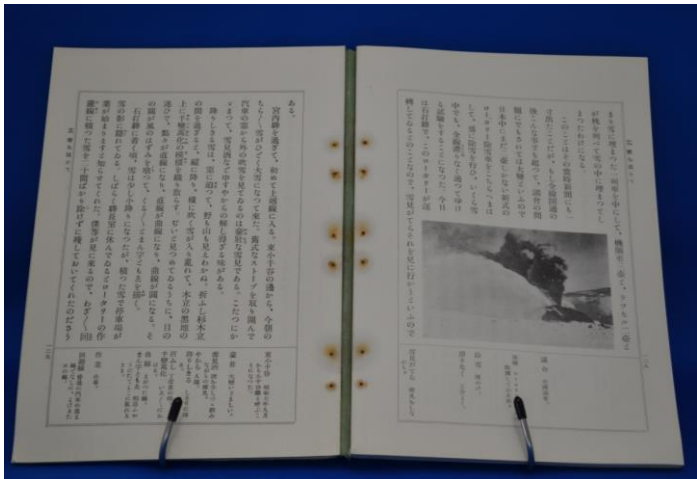
もう起き出した小舎小舎（こやごや）の  
あたりに高い人の声  
霧に包まれ あちこちに  
動く羊の幾群（いくむれ）の  
鈴が鳴る鳴る りんりんと



今さし昇る日の影に  
夢からさめた森や山  
あかい光に染められた  
遠い野末に牧童の  
笛が鳴る鳴る ひいひいと

\* \* \* \* \*

◆『長岡郷土読本』（目黒書店、昭和7年版）

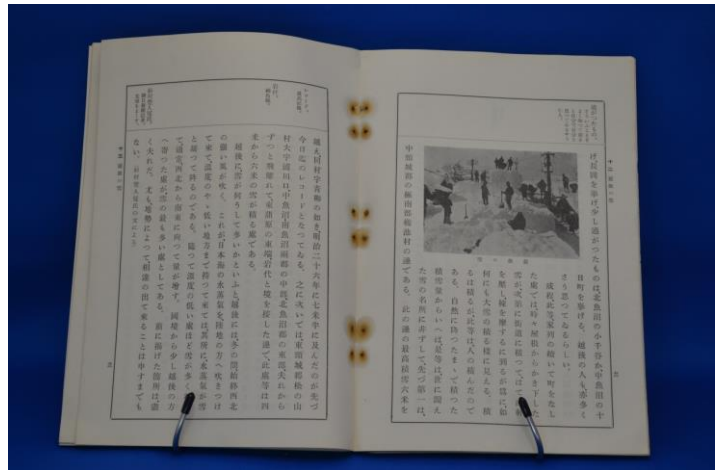


紀行文「雪を追ひて」（『と見かう見』昭和11年書所収）を掲載している教科書です。上越線全通に向け、導入されたロータリー車（除雪車）を楚人冠が見に行く話で、地域の発展のため、上越線に期待していた事情も反映して採用されたと考えられます。

◆『郷土読本』上巻（新潟目黒店、昭和7年版）

新潟県の郷土教育用の小学校教材で、楚人冠が最初に新潟県を訪れたときの記事から「越後の雪」（『越後記』明治44年所収）を掲載しています。

雪の実見内容だけではなく、新潟県に雪が多く降る原理や積雪最高地点の記録なども引いてまとめています。郷土教育において、雪について学ぶためには適切な文章だったのだらうと感じます。



\* \* \* \* \*

杉村楚人冠の残した文章は、「アサヒグラフ」だけではなく、教科書にも掲載されました。それは、楚人冠の文章が受け入れられていたからに他なりません。当時の人々が主に中等学校教育の中で、どのような作品に触れていたのかを感じることができますね。

教科書は、いつの時代も手元にあって、切っても切り離せない大事な書でした。電子化も叫ばれる昨今ですが、教科書の文化を大切にしていきたいですね。

そしていま、杉村楚人冠とその同世代の友人たちの青年期の活動を紹介する展示「明治時代の仏教青年『新仏教』の足跡」が始まっています。展示は10月1日（日）までの開催です。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

さて、つづいて8月に行った月例会のお話です。8月の月例会では、7月15日（土）から7月31日（月）まで行った「葛飾北斎とその時代」について、実際に我孫子で展示されていた北斎の絵画（筆者の好みもありますが）を中心に、解説を行いました。また、実際に浮世絵とはどういったものなのか、絵具には何が使われていたのか、出来る範囲での紹介を行いました。振り返ってみましょう。(\*\_^\*)

☆「葛飾北斎とその時代」



第六十回我孫子市民文化祭記念事業  
特別展 葛飾北斎とその時代  
浮世絵師の代表格 葛飾北斎を中心に同時代に活躍した近世絵師たちの内情・風俗的・心的な姿を大公開

第60回我孫子市文化祭記念事業の一環として、「葛飾北斎とその時代」という展示会を実施しました。15日のオープニングから終了まで、多くの人々に来ていただきました。

平成29年7月15日(土)～7月31日(月)  
会場/我孫子市民プラザ  
午前10時～午後6時 会期中無休/入場無料

葛飾北斎とその時代

浮世絵肉筆 約四十点

浮世絵版画 約十一点

第60回をこえる我孫子市民文化祭を記念し、我孫子市教育委員会と公益財団法人清水軒記念文化振興財団の共同主催で、浮世絵肉筆・版画作品の展示会を開催します。近世絵画の中でも代表格の葛飾北斎の作品を中心に、数川広重、萩原英良、東洲斎写楽、喜多川歌麿など同時代に活躍した浮世絵師の作品も展示します。この機会に日本の近世絵画の素晴らしさと奥深さを体感してください。

《公益財団法人 清水軒記念文化振興財団》  
清水軒記念文化振興財団の前身である財団法人清水文化会館は、昭和30年に寺嶋義一氏によって、千葉県船橋市に設立されました。江戸時代には、寺嶋敏次氏が引水町街並みに面して居を構え、名主を兼ね、また「換筆軒」という私塾を開きました。換筆軒には、清水義輝は多くの友人墨客が立ち寄り、書画を授けられました。その書画作品群をはじめ、我孫子市の各職師を氏が体系的に収集した貴重な日本画コレクションは、国内外でも名高く、日本美術研究の一端を担っています。

月例会では、この作品展の中から作品をピックアップしてご紹介しました。おたよりでは、葛飾北斎の生立ちを今一度見て、作品を振り返ります。

○葛飾北斎

- 宝暦10(1760)年9月23日 江戸本所割下 下水(現在の墨田区亀沢)に生まれる
- 明和元年(1764年) 幕府御用達鏡磨(きょうま)師であった中島伊勢の養子になり、14歳頃から木版彫刻を学ぶ。貸本屋の丁稚、木版彫刻師の徒弟→貸本の絵に関心をもち、画道を志す
- 安永7年(1778年) 浮世絵師・勝川春章(かつかわしゅんしょう)の門下となる(19歳にデビュー) 号は春朗(しゅんろう)

→狩野派や唐絵、西洋画などを学び、名所絵(浮世絵風景画)、役者絵を多く手がける。

北斎の絵画には以下のような画期に分かれて紹介されることがあります。

- ◆春朗期 安永7(1778)年-寛政5(1793)年 師匠である春章から学んだ役者絵、相撲絵を描く。
  - ◆宗理期 寛政6(1794)年-享和3(1803)年 師匠没後、勝川派から去り寛政6年後半には俵屋宗理を襲名。装飾風ではなく、紡錘形の細身の美人画を描く→宗理風と呼ばれる。平仮名落款の洋風版画着手。
  - ◆葛飾北斎期 文化元(1804)年-文化6(1809)年
    - 読本挿絵に情熱を注ぐ(※読本とは中国の伝奇小説を波乱万丈の物語をより展開させるもの)
    - 曲亭馬琴との競作→1400図に及ぶ読本挿絵
- ※代表作は「椿説弓張月」
- ◆戴斗期 文化7(1810)年-文政2(1819)年
    - 号を戴斗とする 読本挿絵→絵手本出版 ※絵手本とは教科書⇒門人が全国各地に
    - 『北斎漫画』初編人気→文政2年十編で終了
  - ◆為一期 文政3(1820)年-天保4(1833)年
    - 風景版画の大成期→「富嶽三十六景」

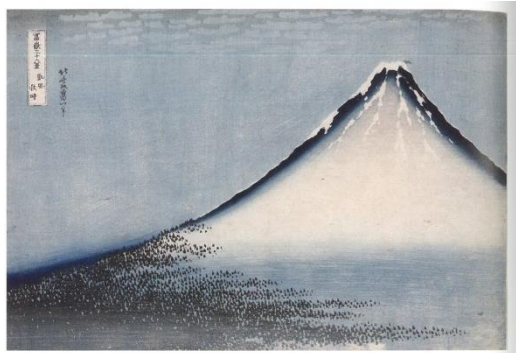
\* \* \* \* \*

葛飾北斎は長い人生の中で、多くの作品を残しました。今回我孫子で開催された作品展の中には普段は見ることのできない貴重な作品も多くありました。



【凱風快晴】

凱風は南風のこと。青空にいわし雲。山頂から赤く焼ける色が次第に薄くなり、裾野からの青と溶け合う。赤富士とは、晩夏から初秋にかけて、早朝あるいは夕方方の赤味を帯びた太陽光により、赤茶けた山肌の色が強調されているようです。赤や青のグラデーションは摺り師の配分によって異なるので、現存する作品と見比べてもよいかもしれませんね。



【青富士】

赤に対しての青富士。異なった摺りの珍しい作品。当初はオランダから輸入された安価で発色の鮮明なベロ藍と呼ばれる化学染料を使い、藍一色で構成しようとしたものであった。藍一色は評判があまりよくなかったようで、後摺では多少の色が加えられた。



【山下白雨】

白雨とは、夏の夕立のことで、黒々とした雨雲に覆われた裾野に巨大な稲妻が一閃する。当然驟雨が降り注ぐはずだが、北斎は闇の中の出来事として見る者の想像に任せることにした。山の上々はそれに対して快晴となっていて、その光を受けて、左奥の山頂は緑に覆われた姿を見せる。富士の上下は天国と地獄が対比されているようです。



【団扇と美人図】

- ・花鳥版画の横大判シリーズ、俳句を添えた中判シリーズ、鴨や鯉、雉と蛇等の珍しい画題を加えた一群の団扇絵も完成度が高い美人画
- 女性の体をS字型にとらえ、形へこだわりをもつ
- ・籠甲やかんざし→最上の上客ありか。仕事前の身支度最中？

【登龍図】



「不二越の龍」だけを取り出し、掛け幅に仕立てたのが本図。登龍は、出世を象徴する吉祥画。黒雲の中を突き進む龍の身体は墨を主体として、描かれるが腹の部分に淡い赤を使い、瞳には青を入れています。背中部分の鋭い突起はいかにも堅そうに描かれ、腹部の柔らかさとは対照的。爪は鋭い牙を思わせる。立体感あふれる描写も素晴らしい。87歳の老人が見据える天空に何が見えたか。龍はどこことなく不安気。

北斎の展示は17日間の会期で、訪れた人は8,893人を数えました。北斎漫画など、葛飾北斎に今一度スポットが当たっています。これを機に北斎について、学んでみる機会を設けてはいかがでしょうか？

「龍の九似」について

●龍の九似とは？

月例会でも話題になった龍について、少し書きますね。

**龍の九似**  
九種の動物の力を一身に結集

 目=兎 未来を見通す洞察力の象徴であり、一切の邪を払う輝きを放つ	 爪=鷹 空を支配する最強の猛禽類のように鋭く、つかんだ獲物を絶対に離さない	 角=鹿 神の使いである鹿に似ているのは、龍が聖獣神様の使者であるため	 耳=牛 現世で起こる吉祥の兆しを漏らさず聞き取る聴力を誇る	 鱗=鯉 飲み込めないものは蛇に似ておられる鯉のような鱗には、無限の福徳が詰まっている
 頭=驢駝 無限の睿智と経験が詰まっており、あらゆる困難を解決する	 手のひら=虎 「龍虎」という言葉があるように、自然界の頂点に立つ虎と同等の力を持つ	 鱗=鱈 長寿の象徴である大鱈が化身したとの語れを持つ	 尾=蛇 財運の象徴である蛇に似ており、金運隆盛、開運出世を祈念	

【九似】とは、龍の九つの部位がそれぞれ他の動物に似ていることを言います。角は鹿、頭は驢駝、耳は牛、目は兎、鱗は鯉、項は蛇、腹は蛟？蛭？、掌は虎、爪は鷹とされています。(上記図を参照。) 龍については、想像上として、その成り立ちも含めて諸説あるそうです。「北斎と龍」、こんな題材で、調べ物をして面白いかもしれませんね。

連絡・お知らせなど

●日本女子オープンゴルフ選手権

我孫子ゴルフ倶楽部にて、9月28日～10月1日 まで、女子オープンが開催されます！

次回の月例会は・・・

次回は平成 29 年 9 月 1 日 (金) 9 時 30 分から旧村川別荘新館で行います！！(\*^\_^\*)